

『俄蔵敦煌文献』 禅籍資料初探

中 西 久 味

はじめに

1992年12月より、ほぼ10年をかけて続けられた、上海古籍出版社・俄羅斯科学出版社東方文学部『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵敦煌文献』(略して『俄蔵敦煌文献』)全17冊の刊行が完了したのは2001年4月である。これによって、1960年モスクワの東洋学会議において存在が知られながらも、大部のコレクションとしては最後まで残っていたロシア科学院東方研究所サント・ペテルブルグ分所に所蔵される敦煌文献が写真版で紹介され、なお問題を含んではいるが、そのほぼ全容が知られるようになった。2002年8月末、筆者は折よく東方研究所サント・ペテルブルグ分所を訪問し、担当することになっていた禅籍資料を直接調査する機会に恵まれた。ただし、ごく短時間に限られていたため、ほんの数点を手にすることができたにすぎない。そのうえ、禅籍資料については、つとに1978年10月、当時の東洋学研究所レニングラード支部を訪問した駒澤大学の岡部和雄氏によって、『伝燈録』以外には禅宗史関係の文書で珍しいものはなさそうであり、メンシコフ氏(L.N. Menshikov 孟列夫)も同意見であったと伝えられている^①。また、1987年8月に3週間滞在して調査に当たった冉雲華氏も、同じくメンシコフ氏より、同分所に所蔵している敦煌卷子のなかに禅籍関係のものは多くないと告げられたという^②。『伝燈録』についても、のちに触れるようにカラホト文書であることが現在指摘されており、こと禅籍に関しては、著しい成果は期待でないというのが大方の見解となっよう。

本稿では、したがって、『俄蔵敦煌文献』全17冊に依拠しながら、そのなかに含まれる禅籍資料について、基礎的な整理をいささか試みておくにすぎない。いうまでもなく、当該文献に関しては、メンシコフ氏の編纂にかかる、いわゆ

る『メンシコフ目録』(1963・1967年。漢訳本は孟列夫主編『俄藏敦煌漢文写巻叙録』上・下冊, 上海古籍出版社, 1999年。以下『M目録』と略す), およびチュグエフスキー(L.I. Chuguevski 丘古耶夫斯基)氏による目録(1983年。漢訳本は『敦煌漢文文書』, 上海古籍出版社, 2000年)があり, 当面の課題については, 前者が指針となっている。しかし, 全17冊に収録されているざっと20000点のうちには, 出版後記にも記すように, なお多数の不明な文献が含まれ, とりわけ第11冊以降に収録された16000点ばかりについては, 断片断片が大量に含まれていることもあって, 文献の比定の試みもなされておらず, 現在それを整理する作業が求められている。こうした状況にあつては, 基礎的な文献資料整理の試みも必ずしも無意味なことではないであろう。ただし, 何分にも大量の断簡のなかから禅籍資料を拾い出す試みであるため, なお多くの資料を見落としているはずであり, 文献の紙質や書写年代についても写真のみでは特定することができない。また, しばしば指摘されているように, 俄藏の敦煌文献とされるものなかにはトルファン文書やカラホト文書等が混入している可能性が高いのであるが, 当面のところ, その問題についても考慮してはいない。これらはすべて今後の課題であることを, あらかじめ断っておく。

以下では, まずⅠとして, すでに『M目録』に拠りながら研究されてきた禅籍資料について略述し, Ⅱにおいて, いささか知見を加えられるものを取りあげることにする。なお, 引用する資料のなかで囲い□を附しているのは不明瞭な文字, ||は行末の印である。

I

(1) 景德傳燈録巻第十一 Φ229v+Φ241v (M目録897)

俄藏の禅籍資料のなかで, まず注目されたのは, 『伝燈録』の写本であろう。さきのように, すでに1978年, 岡部和雄氏もこの写本を調査している。『M目録』では, このΦ229v+Φ241vのほかにも, Дх1728についても, 疑問符を附けながら『伝燈録』であるかと推測していた。『伝燈録』の成立は北宋景德元年(1004)。敦煌文書としては最も遅い時期のものとなることから注目されたわ

けである⁶⁴⁾。

ところが、1991年7月になって、北京大学の榮新江氏が同研究所の写本を実見して、「俄藏《景德伝燈録》非敦煌写本弁」⁶⁵⁾を発表し、この写本はカラホト文書であると断定した。これは、スタインが第三次中央アジア探検のさいにカラホトで収集し、英国図書館に所蔵されている写本（H.マスペロの整理番号ではNo.599⁶⁶⁾）と、もと同一文書であることを明らかにしている⁶⁷⁾。また、Dx1728のほうは『伝燈録』でないことも、後述するように同氏によって指摘されている。

ちなみに、もとの『M目録』897では、この写本に尾題「伝燈録卷第十一」があり、そのあとには「李西鬼兒宅経記」の朱印があるとしているが、1999年に漢訳されたさいには、「李醜兒宅経記」の刻印に訂正され、この写本が「黒水城遺物」、すなわちカラホト文書であることも追記されている。ともに榮氏の所説に従って改訂が加えられたのもあろうか⁶⁸⁾。

(2) 歴代法宝記 Φ261 (M目録1514)

この写本は『M目録』ではただ碑文と記されるのみであったが、1994年10月に刊行された『俄藏敦煌文献』第5冊では、「歴代法宝記」の残巻であると同定されている。

榮新江氏「敦煌本禅宗燈史残巻拾遺」⁶⁹⁾には、この写本が移録されている。さらに、すでに知られている8種の異本（P.2125・S.516・S.1776・P.3717・S.1611・S.5916・P.3727・石井積翠軒所蔵本）と対照され、このなかではP.3717に最も類似していることが指摘され、俄藏写本は、P.3717の第1紙に後続するかと推測されている⁷⁰⁾。

(3) 徴心行路難 D×665+D×2462 (M目録2856)

この写本は、首尾残欠し、標題もない24行の残簡である。すでに『M目録』では、『西域文化研究 第一』（法蔵館、1958年）に「徴心行路難」の擬題で移録されている龍谷大学所蔵の敦煌写本に一致すると指摘している。「徴心行路難」には、龍谷大本・S.6042の系統と、それとは別にS.3017・S.5996・P.3409の系統のあることが知られており、俄藏写本は前者の系統に加えられることに

なる。龍谷大本は首部を欠くが、第8首から第16首までを存し、各首は20句よりなっている⁹⁹。この残簡は、そのうち第8首半ばから第11首まで、移録された189頁56行から190頁82行に該当する。両者を対比してみると、俄蔵写本は龍谷大本に、ほんの数字ほどを補えるにすぎない。また、書写された年代について、『M目録』は、その1468(1)でD×665の部分のみをとりあげて9～10世紀としているが、その2856では訂正して7～8世紀としたらしく、龍谷大本とほぼ同時期の初唐の写本と見なしている。

II

- (4) 楞伽師資記 ① D×1728 (M目録2686) ② D×5464+D×5466
③ D×8300 ④ D×18947R

『楞伽師資記』については、敦煌写本のなかに、すでに7種の漢文異本(S.2054・S.4272・P.3294・P.3436・P.3537・P.3703・P.4564。うちS.4272とP.3537はもと同一本)、さらに2種の藏文異本(プサン目録Na710《2》・Na704)が知られている¹⁰⁰。俄蔵によって、断簡碎片ではあるが、『楞伽師資記』の写本4点ほどを、新たに付けくわえることができる。

そのうちの一点①D×1728については、これも栄新江氏によってすでに指摘されている。『M目録』ではこの写本を「景德伝燈録(?)」としていたが、栄氏が1991年の調査によって、『楞伽師資記』浄覚序の残簡であると断定した。幅20.5センチ、縦14.5センチ。わずか10行の断簡である。同氏「敦煌本禅宗燈史残卷拾遺」¹⁰¹には、それを移録している。あわせて、すでに知られる写本のなかでは、S.4272とP.3537に最も類似すること、また、この残簡の首行は他の浄覚序の写本に見いだせないことを指摘している。

第2の点について確認しておく、浄覚序はその首部がP.4564とP.3294によって知られるが、両写本は銜接せず、なお不完全である¹⁰²。D×1728の首行は、わずか7字にすぎないけれども、その間の欠字を補うことができるのである。いま、その部分のみ書き写しておこう。下線部がD×1728に相当する。

(P.4564尾部) 淨覺才識闡短□□未聞，少
方專

(Dx 1728)

去有因，今逢正法

(P.3294首部) 每至披覽，非管見之所知。淨坐思惟，非小人之所圖。生生盡命，傳達
摩之遺文。世世之中，誓願事之足下。去大足元年，在於東都，遇大通和
(以下省略)



次に②③④は、いずれも、『楞伽師資記』の残簡であることは、これまで指摘されていないものである。

②Dx5464+Dx5466は、1紙27行の首尾を欠く残簡である。罫が入り、字の大きさが不揃いで1行20字から30字にわたるが、平均23、24字。内容は浄覚序文の中間部分「西京，便即於中廣開禪法。浄覺当即歸依，一心承事」から、「无念常真，无染无着，无」までである。当該部分は、すでにS.2054・P.3294・P.3436の3本によって知られており、S.2054を底本とする大正蔵卷八五では、1283頁上段3行から同頁中段15行に相当する。

ところが、この残簡の末尾2行は、たまたま、

☐性本來清淨。清淨之處，實不有心，寂滅之中，本无動念，念緣 〓

之心，心性本來處常寂，寂即无求，无念常真，无染无着，无 〓

となっている。このかぎりでは2行の意味は判然としないが、P.3436に、「心 〓困☐清淨。清淨之處，實不有心。寂滅之中，本無動念。動處常困，〓 寂即无求，念處常真，真无染着」⁴⁵とある部分に該当しているはずである。S.2054にはこの記述が含まれないから、この残簡はP.3436と同系統のものであると考えられる。なおP.3294はこの部分が断欠しているため、どちらの系統に類似するか不明である。

また、他の3本と対校してみると、文字の異同が10カ所程度あり⁴⁶、途中の「(喻衆生之)繫縛」から「善法尚遣捨之」まで、大正蔵では1283頁中段6～7行の26字が欠落している。したがって、この俄蔵写本は、ある程度校勘に使用できようが、さほど良好なものとは言えないようである。



③ D x 8300 は碎片にすぎない。罫が入る。3行あり、首行が空白になっているらしく、後2行の行末の、「弟子曇林序 子也神圖□□ 〓」という、わずか9字が知られる。

④ D x 18947R もまた碎片にすぎない。罫が入る。3行半ほど残るが、やはり首行が空白になっているようである。第2・第3行は「囙辯大乘入道四行 囙羅門國王第三之」の16字となっている。ところが、③ D x 8300 と④ D x 18947R とを接合してみると、

| | | |
|----------|---|----------|
| 囙辯大乘入道四行 | } | 弟子曇林序 〓 |
| 囙羅門國王第三之 | } | 子也神圖□□ 〓 |

という2行が得られる。すなわち、いわゆる達摩の『二入四行論』に附せられた曇林序文の首部であることは明らかである。残念ながら、写真では両者の筆跡が同一であると即断できないのであるが、もと同一文書である可能性が高い。同一であるとする、第2行には「法師者、西域南天竺國、是大」という11字が補えるはずであるから、もとの写本が1行25字程度のものであったことも知られる。このような標題の曇林序文が引用されているのは、知られているかぎり、『楞伽師資記』における第二魏朝三藏法師菩提達摩の章（大正藏卷八五では1284頁下段25～27行）、および『伝燈録』卷三〇である。さきのように、『伝燈録』については、敦煌写本のなかに現在それを確認することができない。この2片が敦煌写本であるとする、『楞伽師資記』の断簡であるはずである。むろん他の未知の禅籍であることも否定できないが、ひとまず『楞伽師資記』の断簡である可能性を指摘しておくことにする。

- (5) 南宗讚・南宗定邪正五更転 ① Φ 171 (M目録1363) ② D x 2175v (M目録2754) ③ D x 6178

『M目録』によって、① Φ 171 は「南宗讚一本」の首題がある1紙17行の写本

であり、② D. x2175v は尾題「南宗定邪讚一本」のある、1紙12行（13行の誤り）の写本であることは知られていた。前者①については、冉雲華氏『《南宗讚》小記』⁹⁶に、1987年の調査にもとづく移録がある。②についても、『M目録』では、この写本が①と同様に『敦煌掇瑣』第三八号、すなわちP.2963の「南宗讚」に該当することを指摘している。したがって題名は異なるが、②も①と同一内容の「南宗讚」である。ただし、実際に詠唱されたかたちについてはひとまず措くとして、表記のうえでは、①と②の句式が異なっている。五更転は各更ごと一首の全5首で構成されるが、①は、一首について「3・3・7・7・7・3・3・3・3・7・7」の形式を取り、5首の冒頭2句がそれぞれ「一更長・二更長⁹⁷」「一更長・二更長」「二更長・三更厳」「三更厳・四更蘭」「四更蘭・五更延」と、第一首を除いて、第二首から第五首までの首句の前に、前首の首句3字が繰り返かえして挿入されている。これはS.4173・S.5529・P.2963・北8371（乃七四）と同様である。②ではその前首の首句を挿入せず、P.2690・北4456v（人七五）と同様となっている⁹⁸。

ちなみに、『俄藏敦煌文献』第9冊に収録されている② D. x2175vの写眞は、きわめて不鮮明で、判読不可能な箇所が多い。筆者はこの写本を実見することができたが、褐色の樹皮紙（？）に木筆で書き付けたものらしく、字体も『M目録』に「潦草」と記されているとおりである。当て字も多く、脱文も見うけられる。句式をのぞくとすれば、内容については、比較的良好な写本であるS.4173・北8371（乃七四）に最も近い。ただし残念ながら、②については、「この残文を校録するほどの価値はない」⁹⁹とせねばならない。

○

さて、『俄藏敦煌文献』第13冊には、もう1本、五更転の曲調形式をとる残簡③ D. x6178が含まれている。この残簡については、これまで注意されていないようである。こちらは、さきの「南宗讚」と同様に、なお異論の余地は残されているけれども、一般には荷沢神会ないしその南宗禅を唱える系統の作によると考えられている五更転のうち、もう一種の「南宗定邪正五更転」と定名されているものである。これは1紙10行の断簡で、標題は無い。上辺部のみ残存し、

下辺部分が破損している。また、五更第5首を擱筆した後に1行の余白が存するように見うけられる。

現在のところ、「南宗定邪正五更転」については、スタイン本が5種、ペリオ本が5種、北京本が2種、敦博本が1種、つごう13種収集できる⁹⁾。これらを比較対照してみると、細かな字句の異同によって、たとえば、四更第4首の第5句を「妄想搏(團)」とする系統と、「放四鉢」とする系統に大別できるように思われる。前者にはS.6923(二種含む)、および北7233v(露六)があり、その他のS.2679・S.4634v・P.2045・P.2270・P.2690v・P.2984・北8325(鹹十八)・敦博本077は後者に属する。S.6083はその中間にあり、P.4617は一行が残存するにすぎず、不明である。いま、③Dx6178について点検してみると、後者のS.2679などの系統のものであることが知られる。ひとまず、良好なテキストとされている後者の系統のP.2045¹⁰⁾に拠って破損している下辺部を補いながら移録しておく。

一更初，妄想真如不異居，**團**則真如是妄想，悟即妄想是真如，念不起，

更无餘，見本性，等空虛，**有**作有求非解脫，无作无求是功夫。

二更催，大圓寶鏡鎖安**團**衆生不了攀緣病，由斯障閉不心開，

本自淨，沒塵埃，**團團**着，絶輪廻，諸行无常是生滅，但觀實

想見如來。三更侵，如來智惠本幽深，唯仏与仏乃能見，聲聞緣

覺不智音，處山谷，住禪**團**，入空定，便凝心，一生還同八万劫，只為擔麻

不重金。四更蘭，法身**團**性不勞看，看則住心便作意，作意還同妄想團，

放四鉢，莫攢抗，任本性，**自**公官，善惡不思即无念，无念无思是涅槃。

五更分，菩提无住復无根，過**團**捨身求不得，吾師普示不望恩，施法

菓，大張門，去障**團**，豁**團**雲，頓与衆生開仏眼，皆令見性免沉輪。

(6) 神会語録關係資料 ①Dx942 (M目録1147)

②Dx1920+Dx1921 (M目録2681) ③Dx4530

『俄藏敦煌文献』のなかには、五更転の曲調をとるもの以外にも、荷沢神会に関わる写本の残簡がいく片が見いだされる。『M目録』では、①は幅22.5センチ

チ、縦14センチ、11行。問答式經典で「無念」を解釈するとのみ記されている。
 ②は幅20.5センチ、縦11センチ、12行。未定名の問答式經典と記されている。
 この①②の両片が神会に関わるものであることは、禅文化研究所唐代語録研究
 班「《南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語》補校」において指摘され、同論文に附
 録として校録されている⁶²。

ここでは、もう1片、全くの断片ではあるが、③ D x 4530 も神会関係の資料
 として付け加えておくことにする。

| | | | | | | |
|---|-------|--------|----------|-------|-------|-------|
| 1 | _____ | □ | 因 | 无 | 物 | _____ |
| 2 | _____ | □ | □ | □ | 此即无物 | _____ |
| 3 | _____ | 見无邊際是見 | □ | _____ | | |
| 4 | _____ | 因 | 見者即見无念 | 因 | _____ | |
| 5 | _____ | 因 | 无見 | 答見是无見 | 仁王 | _____ |
| 6 | _____ | 无物即是真見 | 問 | 因 | 是 | 物 |
| 7 | _____ | □ | 是盲者過非日月咎 | _____ | | |
| 8 | _____ | 答妄起即覺 | □ | □ | □ | □ |
| 9 | _____ | 見 | □ | _____ | | |

わずか9行にすぎないが、「無念」「見」「真見」という神会の思想の特徴となる
 問題が論じられている。第6行の「(見)无物, 即是真見(常見)」は、『南陽和
 尚問答雜微義』(石井本第9節・胡適本第12節)にも見えている。また「是盲者
 過, 非日月咎」は、『維摩經』仏国品(大正藏卷十四・538c)の句で、おなじ
 く『雜微義』(石井本第7節・胡適本第11節)に引用されている。さらに、この
 ③は、さきの①と同一筆跡のように見うけられる。両者は銜接するわけではな
 いが、内容も近似し、もと同一の写本であった可能性も否定できない。

(7) 修心要論 ① D x 649 (M目録1277)

② D x 1996 B + D x 2006 B (M目録2642)

俄藏には、五祖弘忍に帰せられる『修心要論』の写本が2種含まれることに

については、つとに注目されていた。『M目録』によって、①が『尊凡起聖悞脱宗修心成仏要論』の標題をもつことが知られ、同写本は、『蕪州忍和上導凡趣聖悟解脱修心要論』とも題される『修心要論』の異本であると推測されていた。また②の2片については、『M目録』では仏教の問答式経巻とのみ記されるにすぎない。しかし、その思想の特徴である「守心」が論じられていることが併記されているためであろうが、これも『修心要論』の異本であると指摘されている⁹⁹。ここでは両文献について、いささか詮索しておくことにする。

○

まず、①Dx649の写本については、『M目録』に幅64.5センチ、縦26センチ、3紙、26行(36行の誤り)と記され、『俄藏敦煌文献』第7冊に、その3紙全体が収められている。それを点検してみると、なるほど背面に相当する第3紙には「尊凡起聖悞脱宗修心成仏要論 蕪州忍禪師^ニ記」という標題がある。しかし、『修心要論』はこの標題のみで、実際にはこの写本には『修心要論』の本文が含まれてはいないのである⁹⁹。この写本は首尾を欠き、下辺部も破損している。残存している部分のおおよその内容は、(A)首部の5行に五言詩句、ついで(B)11行の「夜坐号一首」、(C)21行の「稠禪師意」が連写され、その最後には、細字で「已上看心法」というコメントが書き加えられている。さらに(D)末尾2行にはカギ括弧が附されて、「般若」などについての文字解釈が綴られたのち断欠している。

では何故この写本に『修心要論』の標題が附されているかと言えば、おそらく破損してしまっている首部に『修心要論』が書写されていたのではなかったかと推測される。

いったい、『修心要論』の敦煌写本は当面の俄藏2本を除いて、つごう9種の異本が知られているが⁹⁹、ほとんどが他の初期禅籍資料と連写されている。その連写の形式からみると、おおよそ3系統に分かたれる。第1に、「了性句並序 崇濟寺禪師満和尚撰」「澄心論」「除睡呪」「入定呪」『修心要論』と連写されるものがあり、S.3558・S.4064・P.3434ならびにP.3777⁹⁹がこの系統であると推測される。第2の系統として、龍谷大学所蔵本⁹⁹があり、これは68紙からな

る策子本で、第1の系統の「澄心論」（龍谷大本では「證心論」）の前に、「四弘誓願」「南天竺国菩提達摩禅師觀門法」「法性論」（擬）が置かれ、また『修心要論』の後にも、さらに「三宝問答」（擬）「觀心論」が続けられている。S.2669 v も龍谷大本と同様の文献が連写されている。ただ、北8390（裳七五）は『修心要論』の標題のみであるが、両系統のうちのいずれかに含まれる。北8391（字四）は『修心要論』の本文のみで、他の文献と連写されていたかについては不明である。

ところが第3に、P.3559のみは以上の2系統のものとは異なり、15種の北宗禅関係の文献を連写する卷子本となっている。それには『円明論一卷』『阿摩羅識論』（擬）『導凡聖悟解脱宗修心要論 蕪州忍和上』『秀和上伝』『導凡趣聖心決』『夜坐号一首』『伝法宝紀並序 京兆杜鼎字方明撰』『終南山歸寺 大通和上塔文』『先徳集於雙峰山塔各談玄理十二』『稠禅師意』『稠禅師藥方療有漏』『大乘心行論 稠禅師』『寂和上偈』『姚和上金剛五礼』『大般若開』²⁹が含まれている。

当面のDx649に含まれる文献は、途中破損し、あるいは不鮮明な部分があるものの、この第3のP.3559のうちの「導凡趣聖心決」「夜坐号一首」「稠禅師意」に該当している。この3文献は、いずれも現在のところP.3559によってのみ知られ、まったくの孤本とされてきたのであるから、俄藏写本は、たとえ完全ではないにしても、きわめて注目されるのである。その内容を点検してみると次のようになる。

(A) 首部の五言詩句は、P.3559の「導凡趣聖心決」の末尾に「願同行者伝之。欲得解言語，唯須見理明」とし、つづいて掲げられている全22句の五言の偈のうち、その第3句の第5字「宙」から、最後の第22句までに相当する。

(B) 続く「夜坐号一首」は、P.3559では全5節で構成されているが、そのうち第4節までで擱筆している。またその第1節には異同があり、P.3559では「端坐寂無事，般思入禅林／妄花随動落，迢迢天籟心」の4句となっているのを、

端坐寂_无事，_般思入禅林 / 妄花随動落，定水_遂幽深
名色通无像，□□□□□ / 嗒然如喪偶，迢迢天籟心

の8句としている。「夜坐号」第一節の原形はこのような8句であった可能性がある。

(C)は、まず「稠禪師意」と記したのち、1字の空白があり、つづいてP.3559の冒頭「問、大乘安心入道之法云何」から「答曰、心雖无形、而有大用……即捨凡法、即聖法⁹⁹」までの前半の6問答に相当する部分が書写されている。この文献でとりわけ注目されるのは、標題が明らかに「稠禪師意」とされていることである。P.3559においては、たまたまこの文献の直前に置かれた「先徳集於雙峰山塔各談玄理十二」の末尾に12人の先徳の名が記され、その最後に「稠禪師意」と続けられている。そのために、この4字がどちらの文献のものか、不明瞭になってしまっている。「稠禪師意」が後続の文献の標題であるとする見解も提出されてはいたが、なお慎重を期して疑問とされていたのである⁹⁹。しかし、Dx649によって、「稠禪師意」がこの文献の標題であることが確定できることになるう。

(D)については、(C)の後にカギ括弧が付けられ、唐突に

答、般若知也、若囿惠也／

囿者彼也、蜜者岸也。答、阿之言无、耨之言上、多之言正、囿之言／
の2行33字が書きつけられて途中で断欠している。般若波羅蜜と阿耨多羅三藐三菩提について、梵音を無視した字義解釈をしているようであるが、現在のところ、この2行の性格は不明とせねばならない。

さて、以上によれば、Dx649はいささか特異な文献ではなかったかと推測される。この写本は、おそらく冒頭に『修心要論』、ついでそれと緊密な関係の「導凡趣聖心決」が配されていたと推測され、それに「夜坐号」「稠禪師意」が接続している。この順列はP.3559とほぼ合致するが、「夜坐号」に続く「伝法宝紀」以下の三文献を欠落しているうえに、「夜坐号」「稠禪師意」ともに全文が掲げられているわけではない。その後に付けられている「已上看心法」というコメントを考慮すれば、この写本は、P.3559ないしそれと同種の文献を前提としながら、看心に関わる箇所を抜粋したものと推測される。看心は、道信の禪で顕在化し、いわゆる北宗禪においても一脈の流れとなっている観法である。憶測を逞しくすれば、P.3559に含まれる一連の文献を伝承していた北宗禪の系統の存在を改めて示唆するものであろう。ただし、末尾2行33字については不

可解である。あるいはP.3559の「大般若開」とされる文献に含まれていた文章であるかもしれない。

○

② D x 1996 B + D x 2006 B の両片は、『M目録』によれば、それぞれ幅7センチ、縦7センチと、幅7.5センチ、縦8.5センチ。筆者の実見によれば、実際には、さらに細かい6片の碎片となっている。6片あわせて、わずか40字程度が残存するにすぎない。こちらのほうは、明らかに『修心要論』本文の断片である。しかも、現在知られている9種の敦煌写本のなかでは、これもP.3559に近似していることが察せられる。いまP.3559の当該部分を移録し、この碎片の部分に傍線を附しておく。鈴木大拙氏の分段では、第8・第9段、田中良昭氏の分段では、第9・第10段に相当する⁹⁹。

問曰、云（何）^{*}知守心是涅槃之根本。答曰、言涅槃者、体是寂滅、无為安樂。我心既真、妄想即断。^{**}〔妄想断〕故、即是正念。正念具故、即寂照智生。寂照智生故、即窮達法性。窮達法性故、即得涅槃。故知守心是涅槃之根本。

問曰、何知守心是大（入）^{***}道之要門。答曰、乃至举手爪甲画仏像、或造恒沙功德者、只是為教道无智慧衆生、作当来之因□^{****}報業、乃是見仏之因。若願自身早成仏者、会是守自真心。三世諸仏無量無辺。若有一人不守心得成仏者、无有是处。

*を附したのはP.3559に問題のある箇所。

「云」は「何」の誤。*「妄想断」3字を欠く。他本によって補う。

****「大」は「入」の誤。****この字未詳。

残念ながら、P.3559は良好なテキストとは言えない。ただし、後より第2行の「会是守自真心」は、他の敦煌写本では「会是無為守真心」となっていて、P.3559のみが、この俄藏の碎片と一致しているのである⁹⁹。

(8) 絶観論 ① D×4259 ② D×5881 ③ D×6230 ④ D×8768

初期禅宗の綱要書として重視される『絶観論』一卷は、もともと敦煌写本によって知られるようになり、現在まで6種の異本（P.2045・P.2074・P.2732・P.2885・北4014〔閩八四〕・石井積翠軒所蔵本）が確認されている。またチベット語訳されている部分のあることも指摘され、最近では、ベルリンのトルファン文書コレクションのなかに『絶観論』の残片が含まれていることも伝えられている³⁹。しかし、俄蔵の中にも何点かの『絶観論』の残簡が含まれていることについては、まったく知られてはいない。ここでは現在まで確認することのできた4点を紹介しておくことにする。



① D×4259 は、9行の残簡で、1行16字程度。罫線がある。全文は以下のようになる。

- 1 □□□□者，造作非真。問曰，究竟云何。||
- 2 答曰，離一切限量分別。於是緣門復起，||
- 3 問曰，凡夫有身，亦見而聲聞覺知。聖人有 ||
- 4 身，亦見而聲聞覺知，中有何異。答，凡夫 ||
- 5 眼見耳聞身覺意如知，聖人即不尔。見 ||
- 6 非眼見，乃至非意知。何以故。過一切限量 ||
- 7 故。問曰，何故經中復說聖人无見聞覺 ||
- 8 知者，何也。答曰，聖人无凡夫見聞覺知，非 ||
- 9 无聖境界者。非有所攝，離分別。問曰 ||

『絶観論』の敦煌本6種の書誌学的研究，校定，訳注などは，すでに柳田聖山氏による成果がある。この俄蔵の残簡は，同氏による分段によれば³⁹，第2段の末から第3段の前半に相当する。かつ，敦煌本6本が，それぞれ2本ずつ3系統のものであることも，同氏によって指摘されている。それに従えば，この俄蔵写本は，P.2074・P.2885の系統のもので，P.2885にほぼ一致している。P.2885

は、法成によって801年頃に書写されたものである。ただ、この写本には第3・4行の記述に混乱が見られる。また第9行も不明瞭であるが、この箇所はP.2885でも破損しているため、対校して正確を期することができない。



つぎに、②Dx5881と③Dx6230は、ともに断簡にすぎず、それぞれ6行、16行の写本であるが、この2本は銜接する。もと同一紙であったものが、分割して収集されたのであろう。いま両写本を合わせて録してみると、以下のようになる。

- 1 [] 是。又問，夫言聖人 []
 2 [] 聖人。答，一切法不斷，一切法不常 []
 3 [] 問，若不斷不常不得者，与凡何以異。答，不同。何以
 4 故。一切凡夫，皆妄相有所斷，妄相有所得。又問，今言凡有所得。
 5 [] 得与不得，有何異。答，凡有所得，即有虛妄。聖无所得，即
 6 [] 虛妄。有虛妄者，即言同与不同。无虛妄者，即无异与不異。
 7 [] 无異者，聖名云何立。答，凡之与聖二俱是名。名中无名，二名即
 8 因差別。如說龜毛兔角也。又問，若人同龜毛者，即是畢竟无
 9 人。遣学何法。答，我說龜无毛，不說无龜。又問，无毛喻何物，有
 10 龜喻何物。答，有龜喻道，毛喻於我。是故聖人无我，而得道
 11 成。又問，若此者，道应是有，因应是无。既立有无，豈非二見
 12 耶。若道非有，我非是 [] 龜非先无今有，故不可說有。
 13 我非先有今无，故不可言因 [] 圓，夫道者，為当一人得之，衆
 14 人得之，為当各自有之，為当惣共得之，為当本来有之，為当
 15 修成得也。答，皆不如汝所說。何以故。若一人得，道即不遍。若衆人
 16 得者，道即有窮。若各々有者，道即有数。若物共有者，方便即空。

これは、柳田氏の分段の、第1段の最後の行から、第2段に相当している。また3系統のなかでは、P.2045・北4014の系統のものである。しかも、この部分

はP.2045によってのみ知られている箇所であるため、とりわけ注目される。煩雑になるため細かく注記はしないが、本文中に*を附しているのは、P.2045と異同がある箇所である。この残簡は、P.2045に比べて必ずしも良好なテキストとは言えないが、たとえば、第9行の「遺学何法」が、P.2045では「遺学何物」、第11行の「既立有无」が、P.2045では「取立有无」としていることなどを改めることができよう。

さらにくわえて、④ D₁x8768 は、全くの碎片にすぎないが、「絶観論」の3字が書写されている。この3字の右側部分が空白行のようであるから、あるいは首題であるのかもしれない。ともかく、俄蔵のおびただしい碎片のなかには、『絶観論』の残簡がまだ含まれている可能性を秘めていよう。

『俄蔵敦煌文献』に含まれる禅籍の残簡は以上にとどまらないが、ひとまず本稿を終えることとする。まことに断片にしかすぎないが、俄蔵においても、そこに含まれている禅籍資料は、思いのほかの拡がりを見せているようである。

注

- ① 岡部和雄「レニングラードの東洋学研究所を訪ねて」(『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』14号, 1980年)。
- ② 冉雲華「《南宗讚》小記」(『敦煌学』15輯, 1989年)。
- ③ ちなみに、俄蔵文献のうちでは、北涼緑禾三年(434)の紀年が最も早く、遅くは大宋咸平五年(1002)の文献が知られている。『俄蔵敦煌漢文写卷叙録』下冊附録「論敦煌写卷の日期標注法」参照。
- ④ 『段文傑敦煌研究五十年紀念文集』(世界圖書出版公司北京公司, 1996年)所収。のち『鳴沙集』(新文豊出版公司, 1999年)所収。
- ⑤ Henri Maspero, *Les documents chinois de la troisième expédition de Sir Aurel Stein en Asie centrale*, London: Trustees of the British Museum, 1953.
- ⑥ この英国図書館蔵の写本は、黄永武編『敦煌宝蔵』55冊(新文豊出版公司, 1985年)に収められる碎片104号・105号。
- ⑦ 『俄蔵敦煌漢文写卷叙録』上冊「出版説明」には、もとの目録に増補刪改を加

えていると記している。

- ⑧ 『周紹良先生欣開九秩慶寿文集』（中華書局，1997年）所収。のち前注④『鳴沙集』所収。なお、この論文には、S.11014文書（『歴代法宝記』引首）も紹介されている。
- ⑨ P.3717の筆跡は、855～859年に成立したとされる『瑜伽論手記』などの木筆字体に類似すると指摘されているから、榮氏の意見に従えば、9世紀半ばころの写本となろう。上山大峻『敦煌仏教の研究』（法蔵館，1990年）409頁参照。
- ⑩ 詳しくは入矢義高「微心行路難——定格聯章の歌曲について——」（『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』所収，1961年），田中良昭『敦煌禅宗文献の研究』（大東出版社，1983年）313頁以下などを参照。
- ⑪ 前注田中著23～26頁参照。
- ⑫ 同論文については前注⑧参照。
- ⑬ 前注⑩田中著27頁以下参照。
- ⑭ 『敦煌宝蔵』128冊312頁。
- ⑮ 柳田聖山『禅の語録2 初期の禅史I——楞伽師資記・伝法宝紀——』（筑摩書房，1971年）57～68頁をも参照。
- ⑯ 前注②参照。
- ⑰ P.2963・S.4173・北8371（乃七四）では、この第一首2句を「一更長」の1句とし、S.5529では「一更長・一更長」に作る。
- ⑱ S.4608・北8369（蘆一百）もこの「南宗讚」の写本であるが、首部のみで、どちらの形式であるのか不明。
- ⑲ 林仁昱『敦煌仏教歌曲之研究』（佛光山文教基金会，2003年）90頁参照。
- ⑳ このうち、S.4634v・P.4617には「大乘五更転」、P.2270には「五更転頌」という別の首題がある。
- ㉑ 『敦煌宝蔵』113冊106頁。
- ㉒ 《俗語言研究》第五期，1998年。
- ㉓ 田中良昭「敦煌禅宗資料分類目録初稿 II 禅法・修道論〔1〕」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』29号，1971年），同氏「校注和訳『蕪州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論』」（『駒沢大学禅研究所年報』2号，1991年）。
- ㉔ 李明権「『俄藏敦煌文献』第七巻紹介」（『敦煌研究』1996年第4期）でも、このDx649写本を『修心要論』として紹介するが、誤解を招こう。
- ㉕ 前注㉓田中2論文参照。
- ㉖ P.3777では「了性句」のまえに、さらに「菩薩惣持法一卷」（「観心論」）を置く。

- ⑳ 『龍谷大学所蔵敦煌古経現存目録』「122 西天竺國菩提達摩禪師觀門法大乘法論」(『西域文化研究 第一』法蔵館, 1958年)。
- ㉑ この写本に含まれる諸文献の命名は、前注㉒田中論文「敦煌禪宗資料分類目録初稿 II 禪法・修道論〔1〕」4. 蕪州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論の項に従う。
- ㉒ Ⅱx 649では、P.3559の「答曰」の「曰」字を欠く。また「即聖法」は「即順聖法」に作る。
- ㉓ 田中良昭「敦煌禪宗資料分類目録初稿 II 禪法・修道論〔2〕」16稠禪師意〔大乘安心入道法(擬)〕の項(『駒沢大学仏教学部研究紀要』32号, 1974年)。冉雲華「『稠禪師意』的研究」(『敦煌学』6輯, 1983年)、同氏「敦煌文献与僧稠的禪法」(『華岡仏学学報』6期, 1983年)。
- ㉔ 鈴木大拙『禅思想史研究第二』305頁(岩波書店, 1951年)。前注㉒田中論文「校注和訳『蕪州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論』」。
- ㉕ なお、Ⅱx1996B + Ⅱx2006Bには、この段落の前に相当する「念」「会是」の二碎片も含まれる。
- ㉖ 西脇常記「關於柏林所蔵吐魯番取集品中的禪籍資料」(《俗語言研究》第四期, 1997年)。
- ㉗ 柳田聖山「絶観論の本文研究」(『禅学研究』58号, 1970年)。同氏『絶観論』(禅文化研究所, 1976年)。